様式 C-19

科学研究費補助金研究成果報告書

平成２３年５月１９日現在

機関番号：１２５０１
研究種目：若手研究（B）
研究期間：2008～2010
課題番号：２０７２０１０２
研究課題名（和文）イテリメン語の音声・映像資料およびテキストコーパスに基づく記述言語学的研究
研究課題名（英文）Descriptive Study on Itelmen based on audio-visual materials and text corpus
研究代表者
小野　智香子（ONO CHIKAKO）
千葉大学・大学院人文社会科学研究科・特任研究員
研究者番号：５０４６６７２８

研究成果の概要（和文）：ロシア、カムチャツカ半島で話されているイテリメン語（チュクチ・カムチャツカ諸語）について、フィールド調査で得られた音声・映像データを分析し、また過去に出版されたテキストから電子テキストコーパスを構築した(そのうちテキスト３編を公開)。そのコーパスを利用してイテリメン語の記述研究を行い、特に動詞の人称接尾辞がある種の談話的機能を有していることを明らかにした。

研究成果の概要（英文）：This is a research project of descriptive study on Itelmen (Chukotko-Kamchatkan), an endangered language spoken in Kamchatka of Russian Federation. The research was performed by building corpus from audio-visual materials through the fieldwork and published texts in Itelmen. As results of the project, 3 texts and a paperwork on Itelmen verbal person marking system were published.

交付決定額

（金額単位：円）

	直接経費	間接経費	合　計
2008 年度	1,600,000	480,000	2,080,000
2009 年度	900,000	270,000	1,170,000
2010 年度	800,000	240,000	1,040,000
総　計	3,300,000	990,000	4,290,000

研究分野：人文学
科研費の分科・細目：言語学・言語学
キーワード：危機・少数言語

１．研究開始当初の背景

国内におけるチュクチ・カムチャツカ諸語についての研究は，ロシア国内に調査に入れるようになった 1990 年代に入ってから本格的に開始された。チュクチ語については呉人徳司氏による音韻論，動詞の自他，語形成，使役構造，否定，抱合，テキスト分析等の研究，コリャーク語については呉人恵氏による音韻論，名詞形態法，語彙，名詞の格，抱合，所有表現等の研究，アリュートル語については永山ゆかり氏による所有表現，テキスト分析，形態論等の研究があり，これらの国内研究者は現在も各個別言語の記述研究を継続している。

イテリメン語については，本研究申請者がこれまで行ってきた記述研究が主要なものとして挙げられる。「イテリメン語における文法的否定表示」(1995) では，イテリメン語では法，人称によって異なる否定詞を使用することを指摘した。「イテリメン語における k-～-knen/-knan，k-～-in/-an の用法」(1995) ではイテリメン語の動詞接辞の一形式の総合的な分析を行い，その動詞の述語形式が遠過去あるいは人から聞いたことを表す述語として機能することを指摘した。「イテリメン語の生活語彙-類義語の整理と分析-」(1998)ではイテリメン語の生活語彙について，類義語や意味範囲の分野のグループ分

けをして整理・分析を行い，語の派生関係を分析することにより，当該の語がイテリメン語において二次的な語彙か本質的な語彙かを示した。また，特定の分野の語彙の多様さがイテリメン語の生活文化の特徴を十分反映していることを指摘し，派生関係が明らかになっていない語彙や，周辺言語からの語彙の借用，逆にイテリメン語から周辺言語への借用，両者の意味範囲の違いといった課題を確認した。「イテリメン語の動詞の自他」(2001) では，イテリメン語の動詞語幹の形態的派生には他動詞の自動詞化と自動詞の他動詞化があり，他動詞の自動詞化では目的語を削除し，自動詞の他動詞化では自動詞主語を目的語化するという，２つの方法があることを示した。さらに他動詞の自動詞化において，他動詞目的語を自動詞主語化するような動詞語幹の形態的派生法がないことが，イテリメン語で受身文が多用されることと深く関わっていることを指摘した。「イテリメン語の動詞語幹の分類とその派生法」(2006) では，イテリメン語の動詞語幹と様々な派生形式について詳細に分類，「イテリメン語の不定詞」(2007) では，イテリメン語における不定詞の形態と用法について記述した。これらの記述研究の基盤として，特にカムチャツカ半島におけるフィールド調査による音声・映像データの収集に力を入れている。1997 年にカムチャツカ半島にて，従来ほとんど研究されていないイテリメン語北部方言の現地調査を行い，動詞の人称に関する表現や会話の音声資料を得ている。1999 年にはイテリメン語の法と人称・焦点の問題を中心に，2000 年 3～4 月には自動詞・他動詞と使役動詞についてフィールド調査を行った。2000 年度～2002 年度には文部科学省科学研究費補助金（特定領域研究 A)「環太平洋の「消滅に瀕した言語」にかんする緊急調査研究」に研究協力者として参加し，フィールドにて基礎語彙と音声資料の収集を行った。また 2002 年度～2004 年度は文部科学省科学研究費補助金（特別研究員奨励費)「イテリメン語北部方言の記述言語学的研究」(研究代表者：小野智香子)，2005 年度は笹川科学研究助成による「イテリメン語の動詞形態論」(研究代表者：小野智香子)，2006 年度～2007 年度は「ロシア及びその周辺の少数言語のコーパスの構築と記述的・歴史的研究」(研究代表者：松村一登）に研究協力者として参加し，精力的にフィールドにおけるデータの収集に取り組んでいる。

国内において，本研究の対象であるイテリメン語の調査と記述研究に本格的に取り組んでいるのは申請者ただ一人であり，特に北部方言の記述研究に関しては，世界的にもリードしている。

国外においては，ロシアの研究者 A.ヴォロージンが旧ソ連時代の 1960 年代から 1970 年代にかけてフィールド調査を行い，イテリメン語南部方言の詳細な記述研究を行っていたが，現在ロシアではイテリメン語の研究はほとんど行われていない。また，ソ連崩壊後は外国人研究者がロシア国内でのフィールド調査を行えるようになり，アメリカやドイツの研究者（主に文化人類学）が研究を始めるようになった。イテリメン語の言語学的研究については，カナダの研究者 J. Bobaljik による論文が何点か挙げられるが，理論言語学的アプローチの研究でイテリメン語のデータを利用するにとどまっている。従って，イテリメン語の記述研究は，現在日本が主導していると言える。

申請者はこれまで，以上に述べたようなフィールド調査によるイテリメン語の記述研究に従事してきたが，イテリメン語話者との一対一の面接による調査方法だけでは，調査項目として設定した現象を解明することが困難であるような事態にしばしば直面した。その後 2006 年度～2007 年度に研究協力者として参加した科学研究費補助金による研究プロジェクト「ロシア及びその周辺の少数言語のコーパスの構築と記述的・歴史的研究」（研究代表者：松村一登）により，なるべく多くのテキストデータを収集し，テキストコーパスを構築して，そのデータに基づいて様々な文法現象を明らかにしていくという方法が，言語の記述研究にとって非常に有効な手段であるという結論に至った。

これまでの研究成果を発展させるため，今後は出版物も含め，フィールド調査による音声・映像資料の蓄積と，これをテキストに起こしてデータ化していくことが，記述研究の基盤作りのために急務であると考える。

２．研究の目的

本研究では，イテリメン語においてこれまで明らかになっていない文法現象，特に動詞の人称接辞の現れ方の解明を進めた。イテリメン語の動詞の人称接辞は，(1) 主語のみ，(2) 主語以外，(3) 主語とそれ以外　の人称を示すことが分かっているが，それぞれどのような場合に現れるのか明らかではない。このような文法現象を明らかにするには，一対一の面接によるは調査方法では思うような結果が得られない。そこで，フィールド調査により得られた音声・映像資料および出版物の電子化によりテキストコーパスを構築し，それぞれの人称接辞について，現れる文および文脈の情報を蓄積して分析を行い，どの接辞がどの人称を表すのか，またどのような場合に現れるのかを明らかにした。

３．研究の方法

本研究の研究目的を達成するため，以下の

ような手順で計画を遂行した。

(1) フィールド調査による新たな音声・映像資料の獲得
　ロシア連邦カムチャツカ州におけるイテリメン語のフィールド調査を，毎年8月～9月のうちの4週間程度実施した。フィールド調査では高音質デジタル録音機器および，HDデジタルビデオカメラを用いて音声ならびに映像の記録を行った。デジタルでの録音および録画を行い，大容量のストレージデバイスを用いて音声および映像データを蓄積した。

(2) 過去に収集された音声・映像資料の電子化
　過去に記録されたアナログオーディオテープによる録音音声や，アナログビデオテープによる録画映像のデジタル化を行った。また，過去に記録されたDATによる録音音声や，デジタルビデオテープによる録画映像を，コンピュータで処理できるように加工した。

(3) 音声・映像資料からテキストを起こして電子データ化

(4) 過去に収集された出版物のテキストの電子化
　これまでに出版されたイテリメン語テキストを収集し，コンピュータによりテキストを入力して電子データ化を行った。イテリメン語テキストにロシア語訳が付随している場合には，作業の効率化を図るため，スキャナーによりテキストを画像データとして取り込み，OCRソフトを使用して自動的にロシア語テキスト読みとりと電子化を行った。

(5) 電子化されたテキストデータを分析用に加工し，テキストコーパスを構築

(6) テキストコーパスを用いた，イテリメン語の記述研究

４．研究成果
(1) 研究の主な成果
①毎年８月～９月に，イテリメン語話者の居住地であるロシア連邦カムチャツカ地方チギリ村においてフィールド調査を実施した。ここではイテリメン語話者との面接調査，複数の話者による会話の録音・録画，単独の話者による録音・録画を行い，新たなイテリメン語音声データおよび映像データを収集した。本調査では、合計約 88 時間分の録音データおよび約５時間の録画データが得られた。
②過去に記録されたアナログオーディオテープによる録音音声や，アナログビデオテープによる録画映像のデジタル化を行い，過去に記録されたDATによる録音音声や，デジタルビデオテープによる録画映像をコンピュータで処理できるように加工し，音声を抽出して，イテリメン語テキストの文字起こしを行った。
③これまでに出版されたイテリメン語テキストを収集し，コンピュータによりテキストを入力して電子データ化を進めた。
④収集したデータからテキストコーパスを構築し、その一部としてテキスト３編を公開した。またテキストコーパスを利用してイテリメン語の記述研究を行い、動詞の人称接辞の分析を行って、成果を発表した。

(2) 得られた成果の国内外における位置づけとインパクト
　イテリメン語の音声・映像資料の集約と蓄積、テキストコーパスの蓄積については、国際的にも最大規模のものが得られた。またこれに基づく記述研究にも進歩が見られ、イテリメン語学の動詞の人称接尾辞の機能を明らかにできたことは、イテリメン語学のみならず、古アジア語学、および通言語学的・言語類型論的に珍しい現象の解明につながった。

(3) 今後の展望
　イテリメン語話者は年々減少しつづけているため、これまで以上に生きたデータの記録を急ぐ必要がある。またテキスト電子化は継続して行い、テキストコーパスのさらなる充実化を図る。
　記述研究については、まだ解明されていない現象や、記述が不十分な文法事項についての研究を継続する。そのうち、アスペクト、形動詞、副動詞、名詞修飾形などは研究が遅れているため、これらを重点的に調査する必要がある。

５．主な発表論文等
（研究代表者、研究分担者及び連携研究者には下線）

〔雑誌論文〕（計５件）

① 小野智香子、「イテリメン語の動詞人称接尾辞の機能について」、『北方言語研究』第１号、査読有、2011、23-39. http://eprints.lib.hokudai.ac.jp/dspace/handle/2115/45228
② Чикако Оно (Chikako Ono), К вопросу о связях ительменского языка с чукотско-корякскими языками на основе сравнения лексики, *Проблемы социального развития, образования, традиционного природопользования и сохранения языков коренных народов Камчатского Края*, 査読有、

2010、86-88.
③ 小野智香子、「イテリメン語テキスト４」、『環北太平洋の言語』第 15 号、査読無、2010、147-158.
④ 小野智香子、「イテリメン語テキスト５」、『ユーラシア言語文化論集』第 12 号、査読無、2010、205-219.
⑤ 小野智香子、「イテリメン語テキスト３（イテリメンの民族料理：１）」、『ユーラシア言語文化論集』第 11 号、査読無、2009、151-164.

〔学会発表〕（計１件）
①小野智香子、「イテリメン語における他動性交替」、北海道周辺地域における他動性交替に関するシンポジウム、2011 年 3 月 5 日、札幌学院大学

〔図書〕（計１件）
①中川裕監修、小野智香子 他、『ニューエクスプレス・スペシャル　日本語の隣人たち』、白水社、2009.

〔その他〕
①ホームページ
http://homepage.mac.com/chono/Chikako_Ono/

②アウトリーチ活動
一般向けフォーラム「言語で巡るシベリアの旅-極寒の地に暮らす人々とことば」にて講演およびパネルディスカッション、2011 年 2 月 5 日、北海道大学

６．研究組織
(1)研究代表者
小野　智香子（ONO CHIKAKO）
千葉大学・大学院人文社会科学研究科・特任研究員
研究者番号：50466728